慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	稀少性原理と先験主義
Sub Title	Scarcity definition and transcendentalism
Author	富田, 重夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.8/9 (1951. 9) ,p.507(43)- 521(57)
JaLC DOI	10.14991/001.19510901-0043
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510901-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活の組合せが求められなければならない。それは依然として家族制的相互扶助に片足をふみつつ、その教育的序列は既に崩壞の過程にあるもの、いいかえれば前近代的な家族的生産に一部依存しながらも、これに吸收されず逆にこれを基礎として勞働市場に長期滯留する生活不安にたえようとする二類型として裏附けられるのではないであろうか。

これはかつて潜在失業のプールとみなされていた農山村において、すでに歸農の經營的餘力のないまま失業者をかかえこみ、彼等は一應全世帶員の犧牲において徒食しながらなお勞働市場にわずかの勤務を求めては身輕にとび出してゆこうとする傾向とも考え合せることができよう。(註1) また初期の産別系組合がその大勢順應的組織態度や經營内的性格にもかかわらず、かえつて經營の人的物的あるいは財産的背景を利用することによつてその未成熟をおぎない、活潑な闘爭を展開しえた所以とも全然無關係ではないのかもしれない。(註2) 勿論それが國民大衆の民主化、勞働者階級の近代化として望ましい傾向であるか否か、またそもそも現實はかかるものとして確認されるか否か、すべては今後の問題としてのこされるであろう。唯本編ではこれを彼等の飛躍的近代化とも舊態依然的停滯とも異る第三の可能な動向として、考えられる少くとも一つのものであることを、指摘すれば足りるのである。

（註1）　籠山京氏「失業潜在化の過程」勞働問題研究第四八號。殊にその芝富村アンケート（1）及び（3）參照。

（註2）　東京大學社會科學研究所編「戰後勞働組合の實態」昭和二五年、一〇頁、一六―一七頁。

稀少性原理と先驗主義

富田重夫

一　序論

周知の如く經濟學方法論には二つの大きな流れがある。即ち英國流の方法論と獨逸流のそれである。而して前者は主として經濟理論（法則科學としての）そのものの自己反省と云ふ形に於いて、その問題が設定せられてゐる故に、その方法論はその經濟理論と表裏の關係に立つてゐると思はれる。これに對して後者は、一方には歴史學派の經濟史學方法論に、他方には純粋なる哲學としての認識論に、その起源と出立點を有する故に、その方法論と現存せる經濟理論との具體的關聯は必ずしも明確とは思はれない。歴史學に於ける方法と理論に於ける方法とは各々その所を有しつゝ、相異なるものであり、他方形式の學としての認識論と内容の學としての科學とは、兩者がそれ〴〵に嚴密性を増せば増すほど相分たるべき性質のものである。認識論上の先驗主義、或は經驗主義は科學の内容そのものを規定するを得ない事は勿論、後者の發展過程との即應的關係を見出す事も困難である。それはニュートン物理學を絶對的眞理と前提して、その上にその認識の可能性を問ふ彼のカント哲學に對するヘーゲルの一つの批判點であつた。(註1) 既成のものに牆を繞らすと云ふ事が多くの方法論者自らの主張する如く方法論乃至認識論の學としての性格であり、そこに斯學の意義と限界が存すると思はれる。

他方、科學の發展をその内容に即して、その用ふる概念の性格より之を考察するならば、その發展を劃する一つは所謂實體概念より關係概念への轉換にある如く思ふ。嘗て、W・ケーラーやK・レヴィンが心理學に於いて、(註2) 又E・カッシラーが數學に關聯して、(註3) 關係概念への科學の發展を示したが、我が經濟理論の發展に於いても、茲に一顧を要する問題があると思ふ。前に私は經濟なる概念に就いてL・ロビンズの物質主義定義と稀少性定義の概念の性格に於ける相違を考察したが、(註4) 此は正に實體概念としての經濟概念と、關係概念としてのそれであつた。私は科學の方法論的乃至認識論的考察が科學の理論内容に即する爲には、即ち兩者が密接に具體的に關聯して行く爲には、科學に於ける概念の性格を檢討しなければならないと思ふのである。而して一定の概念が構成せられるには、何らかの認識の主觀客觀の關係が豫想せられてゐなければならない。斯くて概念の性格を檢討する事は、更に根本的にかゝる概念が如何なる認識の主客の在り方から成立するかを明らかにしなければならな

いであらう。

以上の如く考へる故に、私は先づ一方にカントの認識論的立場を經濟學認識論に導入せる左右田喜一郎氏の經濟概念の先驗論的構成論を考察し、他方關係概念としての稀少性定義に於ける經濟概念を檢討して、兩者の論理的關係を明らかにし、更に自然科學に對する文化科學の特性を考慮しつゝ、稀少性概念成立の基礎たる認識の構造を論じてみたいと思ふ。

（註1）ヘーゲル著、松村一人譯「小論理學」一八二頁

（註2）W・ケーラー「ゲシュタルト心理學」及び「心理學に於ける力學說」

K・レヴィン「トポロギー心理學の原理」及び "Dynamic Theory of Personality."

（註3）E. Cassirer, "Substanzbegriff und Funktionsbegriff,,

（註4）拙稿、三田學會雜誌、第四十三卷、第三號

二　先驗論的概念構成

左右田喜一郎氏に依つて主張せられた經濟概念の先驗論的構成とは如何なるものであつたか、氏は此をその所謂心理主義的實在論的概念構成の批判に卽して展開する。近代の經濟學に於いても尙多く見られる所の此の心理主義的概念構成とは、「經濟學の出發點を欲望に求め、之より其對象たる物一般を得、其の內より經濟學上の財を導き之に關聯せしめて經濟行爲の概念を定め進んで之より經濟の意義を決し、更に經濟組織の完成したるものとして國民經濟を拉し來りて吾が經濟學の對象を定め得べし」[註1]となすものであり、又物一般より經濟財を導出するに當つて例へば「物全般から先づ內界物を去り、之に對する外界物より權利物及び勞力物を含む無形物を去り、更に有形物中よりは自由物及び不自由物たる非經濟物を去りて後に殘留する財のみを經濟物と云ふ」[註2]が如きものである。こゝに問題となるのはこの概念構成が欲望から出發すると云ふ點にあるのではなくして、一般に單なる存在系列の分類の結果として經濟學の對象を決定せんとする點にある。換言すればものの存在を前提してそれより或る種のものを經濟的として任意に抽出する點にあるのである。此は正にL・ロビンスの物質主義定義に於ける經濟概念の classificatory なる構成と同一のものである。[註3]さて、左右田氏はかゝる概念構成に對して次の如く批判する。卽ち、右の經濟財なる概念の決定に就いて檢討する時「或る種のものを排し、他の種のものを採り來りて、之が經濟學上の正當なる概念なりと云ふ決定を與へ得る所以の標準は何處にあるか」と。卽ち何故に一方を採り、他方を排するか、それが如何にして可能なりやが何ら明示されてゐないのである。從つてこの立場からすれば單に斯くある故に斯くの如しと云ふに止まり、斯くて此は經驗科學の領域に於いて "quaestio juris,, に觸れる事なく "quaestio facti,, に終始せるものと云はざるを得ず、かゝる概念、更にそれに基づく理論の論理的妥當性は之を證すべくもない。カントと共に、かく存在したと云ふ事は出來ても、何故それ以外のものであつてはならぬかを證すべき根據を缺いてゐると云はざるを得ない。更にかくして構成せられたる概念は「此の場合に經濟物とは必ず欲望充足の對象の或る一種のものとしてしまつて經濟物と云ふ概念を吾人の認識對象の『實在』に結び付くるに至るから、經濟物と非經濟物とが概念上洗通を許さぬ確固不動の區分となつてしまひ、所謂經濟物は始めから終りまで欲望充足對象中の或る一定の範疇を形成するが如く說かるゝのである」[註4]。その結果「或る一定の欲望物、行爲、組織の一定の範疇は少くとも或る期間、狀態、關係に於ては常に而して必ず經濟的なるべし」[註5]と云ふ事になる。換言すれば存在に纏り附く概念の固定性を脫し得ないのである。

さて以上の心理主義的概念構成の缺陷を正すものは、唯かゝる概念構成に當つて何らかの先天的要素を認める事である。卽ち種々樣々なる欲望行爲等の存在系列に對して論理上先なるものを認める事に依つて、その概念は必然性と客觀性を有し得るのである。經驗科學としての經濟學に於いても又かゝる先天的要素がなければならない。斯學に於けるかゝる先天的要素とは窮極的には「經濟的文化價値」と稱し得べきものであり、之を「認識目的」として、之に照應せしめて存在が把握せられる所に一切の經濟學上の概念は構成せられ得るのである。併し玆に經濟的文化價値とは斯學の認識目的として窮極的 Sollen なる故に、それ自體は對象的認識を許さざるものであり、從つて經驗的文化科學としての經濟學に於いては更に先天的にして且つ歷史的なる概念、價値と存在を媒介すべき概念（＝嚮導概念＝貨幣概念）なるものが要請せられねばならない。かくて經濟的文化價値をその認識目的とし、嚮導概念としての貨幣概念を持ち來たす事に依つて經濟學の概念構成は可能となるのである。前述の心理主義的概念構成も實はかゝる先天的要素に導かれて始めて可能となるのである。存在系列の諸々の分類の結果として得られるとする經濟概念も何ら論理の必然を以て得られざる結果ではなくして、無意識的にも何らかの先天的要素に依つて導出せられるべき結果でなければならない。かくの如くして構成せられたる概念は論理的に必然的たるべく、又、前述の心理主義的構成に基づく概念の如く或る種のものは常に必ず經濟的にして、他は又常に必ず然らずと云ふ如き不合理を免れて「同じ人も、行爲も欲望も、同じ物も、組識も、夫々の認識目的に係りて同時に而して同じ狀態に於て諸學の對象となつて、夫々の異れる概念が形成せられうる」[註6]事となるのである。或る事物はそれ自體に於いて經濟的であるのではない。それはその事物を或る觀點から卽ち經濟的文化價値なる認識目的に照應して把える所に經濟的となるのである。

以上は左右田氏の先驗主義的概念構成論の概略であるが、リッケルト、ウェーバー等に於ける所謂「價値關係的」に構成せられたる概念の論理的特性は右の如きものである。之を要するに先驗主義的概念構成論の窮的意義は一に認識論的に認識の主客の關係に於いて、その認識主觀の形式としての諸文化價値に依つて諸學の概念が構成せられるとなす事、斯くて存在に纏り附く概念の固定性を克服した點にあると考へられるのである。

茲に於いて先驗主義に就いての檢討を後に讓り稀少性定義に於ける經濟概念を考察したい。

（註1）　左右田喜一郎著「經濟哲學の諸問題」　五七頁

（註2）　左右田喜一郎著、前掲書　五八頁

（註3）　L. Robbins, Nature and Significance of Economic Science, P. 16,

尙左右田氏はロビンズの classificatory なる概念のみならず稀少性定義に於ける經濟概念をも又その所謂心理主義と斷じてゐる。此の點は後に一批判點として論ずる。

（註4）　左右田喜一郎著、前掲書　六八頁

（註5）　左右田喜一郎著、前掲書　六九頁

（註6）　左右田喜一郎著、前掲書　七〇頁

三　稀少性定義

經濟學の對象決定の問題に就いてL・ロビンズは物質主義定義と稀少性定義を區別した。（註1）而して前者は之を E=M, non-E=non-M. (E=economic, M=material) を以て示し得べきものである。茲にMとはその內容的側面より見れば、常識的に通常物質的欲望と云ふが如き物質的なるものを指示し得るし、或は價格に關係する現象とか貨幣なる測定尺度を以て測定し得る厚生部分と考へられるが、之をその形式的側面よりすればMとは對象的存在の或る屬性（主觀の表象內容）を記述せるものである。從つて茲にEとは、物とその屬性に基礎を置く所謂實體概念としての經濟概念と考へられるものである。それはE・カッシラーの次の言葉に依つて端的に示されるものである、即ち「實際、茲に前提せられてゐるものは、唯、測り難い程多數なものの定在と、多くの個々の個別的存在からそれらの多くに屬してゐる同一の要素を抽出する精神能力とだけである。我々はかくの如くして、同一の屬性を共通に有してゐる事に依つて特徵附けられる對象を一つの類に結合し、この方法を繰り返へしてより高度の段階へと押し進める事に依つて漸次、個々の事物から引出される事物的類似性の諸段階に應じて、益々より確實な存在の秩序と分類に達するのである、……かくて生ずる概念は感覺的現實に無關係なものとして、之に對立するものではなくして、この現實そのものの一部分を構成するのである。（註2）即ち現實に直接に包含せられてゐるものの抽出物なのである」從つてかゝる經濟概念は前述せる如き存在的制約を免れ得ない。

A・C・ピグーが「何らかの嚴密な方法で經濟的厚生を他の厚生部分から分離する事は實際出來ない事柄である。と云ふのは貨幣尺度と關聯する事の出來る部分は、この出來ると云ふ事が『容易に出來る』と云ふ事か、或は『かなり無理をして出來る』と云ふ事か、或は又『非常な無理をして出來る』と云ふ事かそのいづれを意味するかに依つて異なつて來るからである。（註3）從つて我々の領域（經濟的）は必然的に漠然としてゐる。」と云ふのも此の事を裏書きするものであらう。對象的存在の一部として經濟的なるものを求めんとする故に、vague line に撞着するのである。併し經濟性は或る種のものに固有な屬性ではない。更にこの種の概念には何故にそれが經濟的でなければならぬかの論理的根據が明らかではない。A・L・マクヒーもその所謂記述的定義 descriptive definition（＝物質主義定義）に對して分析的定義 analytical definition（＝稀少性定義）を說くに當り、前者に就いて「それは、何故に或るものはそこにあり他のものは然らざるかの論理的理由を與へない。この機能は記述的定義に對する分析的定義の特質と考へられる」と云つてゐる。（註4）

以上に對して稀少性定義に於ける經濟概念は之を E=M に對して示せば、E=(P.G.) (P=person, G=goods) を以て示し得るであらう。人間は何らかの欲望を有する。併し茲にPとは如何なる種類の欲望を有するものであらうと、それは問ふ所ではない。又ものは種々なる屬性を有する。併し茲にGとは如何なる屬性を有するものであらうと問題ではない。問題はPの欲望及びGの屬性の種類に在るのでなくして、兩者の關係そのもの、或は兩者の相合して釀し出す狀態そのものにある。Eなる經濟概念は正にかゝる關係或は狀態そのものである。C・メンガーを始め、L・ミーゼス、L・ロビンズ等に於いてこの關係は P∨G（Pは需要量、Gは供給量）であつた。而してこの關係或は狀態なるものは常に固定的に存在するものではなく、その時、その場所に於いて成立するものである。常に必ず存在するとは却つて如何なる時間、空間をも超越する故に、現存せざるものである。これに對して茲に關係とは何らかの具體的時間・空間に於いて成立する。具體的時・空とは個的な時・空である。具體的なるものは、かゝる個的な時・空に於いて現存する。他方前述する如く、こゝに於いてはすべての欲望的人間とすべてのものがその中に含まれてゐる。勿論それは可能性として包含せられてゐるのである、即ち經濟的たりうる可能性を有するものとしてである。一面何處までも個的に成立し乍ら、他面すべてのものをその可能性に於いて包含すると云ふ事が茲に示されるEの論理的性格である。斯くてかゝる關係或は狀態そのものである經濟概念は所謂關係概念として、彼の實體概念としてのそれの如く個的なものの抽象に於いて考へられる。表象の普遍的內容ではなくして、個的なものに於いて一般的妥當性を要求するもの、換言すればすべての個的なものがそれより導出せらるべき一般

的形式と考へられるのである。E・カッシラーは數學の一般概念に就いてのランベルトの所說を引用して曰く「數學の一般概念に於いては、それが適應せらるべき特殊の場合の規定性は放棄せられてゐるのではなくして、嚴密に保持されてゐる。數學者がその諸形式を一般的に構成する時、これは單に特殊な場合を悉く持つてゐるのではなくて、一般的形式からこれらを導出し得ると云ふ意味と傾向を持つてゐるのである。」と。(註5) 又曰く、「個々の場合は考察外におかれてゐるのではなく、それは變化の一般的過程の一定の段階として確定され、確保されてゐるのである。更に新たに茲に示されてゐる事は、表象の一般性ではなくして、系列原理の一般的妥當性が概念の特質をなしてゐると云ふ事である。我々は眼前に存する多樣性から何らかの抽象的部分を抽出するのではなくして、この多樣の系列の爲に一義的な關係を、その關係を一つの明確な法則に結び付けて考へる事に依つて、創り出すのである」と。(註6) これは正に稀少性定義に於ける經濟概念に妥當する事柄であると思ふ。而して以上に論述せる二つの概念の論理的性格の差異を把握する事は經濟理論の發展に於いて極めて重要な意義を有するものと考へる。彼の Marginal Revolution の論理的意義は茲に求められなければならないと思ふのである。

(註1) L. Robbins, op. cit., chapter 1.
(註2) E. Cassirer, Substanzbegriff und Funktionsbegriff, P. 5-6.
(註3) A. C. Pigou, Economics of Welfare, P. 11.
(註4) A. L. Macfie, Economy and Value, P. 2.
(註5) E. Cassirer, op. cit., P. 24.
(註6) E. Cassirer, op. cit., P. 25-26.

四　兩者の論理的關係

以上に於いて私は左右田氏の先驗論的構成に依る經濟概念と稀少性定義に於けるそれとを個別的に考察したのであるが、然らば兩者の論理的關係は如何なるものであらうか。既に前述する所から明らかなる事は、前者の所謂心理主義的概念構成に於ける經濟概念と、後者の所謂物質主義定義に於けるそれとは同一の論理的性質を有するものであり、而も兩者のそれ〴〵に對する批判に於いて、その所說を共にしてゐるのである。即ち、第一にそれらの概念にはその論理的必然性が缺けてゐる事、第二に、それらが共に存在の普遍的表象內容なる故に、それらは存在に制約せられ、固定的なる事これである。斯くて兩者がそれ等を克服せんとする意圖に於いて同一であつたのである。詳言すれば前者、先驗論的概念構成は認識主觀の形式としての價値への照應に依り、他方後者、稀少性定義は關係概念としての經濟概念を說く事に依つてそれ〴〵に經濟概念の論理的必然性の缺除と存在的制約を克服せんとしたのである。然らば兩者の

根本的な相違は何處にあるか、又左右田氏が稀少性定義をも、その所謂心理主義と云ふは何故であらうか。抑〻所謂先驗主義とは所謂認識論上の一つの立場を示すものである。從つて茲に於いては認識の主觀と客觀及びその關係が問題である。それ故ものと人間の意識との關係は、かゝる認識の主客の關係なる形に於いて把えられてゐるのである。而して先驗論的概念構成は、この關係に於いて、概念構成の根底を認識の客觀ならぬ認識の主觀の觀點に求めたものである。これに對して稀少性定義に於いては、ものと欲求的人間の關係が問題であり、ものと人間の意識の關係は、かゝる形に於いて把えられ、この關係を示す事自體が直ちに前述の克服をなす所以であつたのである。茲では認識の主觀としての「人間」ではなくして、欲求する主體として現實界に於いて經濟的活動を營む「人間」が問題なのである。即ちかゝる欲求的人間の意識との關係に於いてものが相對化せられてゐるのである。兩者の間には經濟學者に問題があるのか、經濟人に問題があるかの相違がある。茲に於いてそれは認識論と經驗科學としての經濟學の相違と云へばそれ迄の如くであり、又兩者の相違は混同されてはならない事は勿論である。併し先驗主義が單に Sollen としてそれ自體對象認識の不可能なる經濟的文化價値を要請するに止まるならば、經驗科學の發展に如何なる貢獻をなし、又如何にして之に即し得るであらうか。又かゝる Sollen と經驗的 Sein とを架橋する嚮導概念として貨幣概念を持ち來すとしても、その先天的且つ歷史的なる論理的性質は單に貨幣概念に附與されてゐるに止まり、內容的且つその定式化に於て例へばA・C・ピグーの measuring-rod of money (註1) への關係に於いて經濟的厚生を考へるのと何處が異なるであらうか。況んや稀少性原理をも單に心理主義と考へるのは、關係概念の有する論理的特質を理解せざるものではなからうか。(註2) リッケルト等もその方法論的論議に於いて關係概念の論理的特質を問題としてゐない。例へば曰く「我々はこの又はあの特定な一回的現實の特殊性や個性が全く含まれてゐない概念を悉く普遍的と呼ぶが、その際普遍的諸概念の依つて成立する諸過程に於ける差別は顧慮しない。同樣に我々はそれが關係の概念であるか、事物の概念であるかも之を問はない」(註3) 云々と、併し私はこれらの概念の論理的特質を檢討する事の中にこそ、方法論的乃至認識論的論議をして科學內容に即せしめ得る可能性を見出し得ると考へるのである。而も前述する所からして、先驗主義の有する論理的觀點は關係概念の論理的特質に相應すべく、斯くてかゝる概念に依つて、經驗科學が構成せられる所に先驗主義は經驗科學の中に自らの具體的適應を見出し得ると思ふのである。E・カッシラーは「アインシュタインが、相對性理論に於いては、時間・空間から『物理的對象性の最後の殘滓物』まで取り除かれてゐると云ふ事をこの理論の特質として示してゐるとすれば、批判的觀念論の立

場は、この理論に依つて、經驗科學そのものの內部に於けるその最も嚴密な適應と完成を創り出されてゐると云ふ事が茲に示されてゐる」(註4)と云ひ、先驗主義と物理學上の相對性理論の具體的交涉を明らかにし、認識論と經驗科學の關係に重要なる一つの歸結を與へたのであるが、我が經濟學に於いては、先驗主義は稀少性原理の中にその適應を見出し得ると考へるのである。

茲で更に根本的に以上の如き二つの克服の方向の生ずる根元を考へてみたい。これには所謂文化科學（或は精神科學、社會科學）の特性を考へてみる必要があると思ふ。從來自然科學と文化科學とは諸々の觀點から區別されて來た。その對象の側面からは、或は物的存在と心的存在の區別に或は又存在（物的及び心的）と價値の差異に、又作用の側面からは普遍化的及び個別化的概念構成と云ふが如きである。今茲にこれらに就いて論ずる事は出來ないが、先づ文化科學と云ふものが、何らかの意味で人間的なるものに關係してゐる事は事實である。物理學に於ける所謂ニュートン物理學—相對性理論—量子力學への發展は之を認識の主觀に就いて見れば意識一般としての主觀—觀測者としての主觀—操作的主觀への發展であり、之を客觀に就いて見れば、主觀に對する客觀から、主客の不可分離の認識を通じて所謂主觀客觀を包む高次の客觀への發展と考へられる。斯くて物理學の對象と雖も所謂意識一般に對する客觀ではなくして、我々の實驗的操作を媒介してゐる所の客觀と考へられなければならない。(註5)然し物理學に於いては、ものと人間の關係は何處まで行つても認識の主客の關係の外に出るものではない。これに對して文化科學に於いては人間とものの關係は二重的である。我々は一方科學者としては認識の主觀として認識の客觀に對し、他方自らこの客觀に於いてものに働きかける主體である。我々は經濟學者たると共に經濟人である。それ故我々は文化科學に於いては、自己が自己を認識しなければならないと云ふ事態に置かれてゐるのである。リッケルトは、現實は異質的にして且つ連續的であり、これは不合理なるが故に、現實そのまゝを直ちに合理的に認識する事は出來ない。而して現實の合理的認識の可能なる道は、この現實を同質的連續へか異質的非連續へかのいづれかへ環元する以外には存しないと考へ、茲に現實そのものの構造から二つの科學の成立の根據を示した。(註6)彼の爾餘の論議の根底はこの考への中に存すると思はれるのであるが、これに對して私は文化科學の認識構造の特質は前述の人間存在の二重的性格の中に求め得べきものと思ふのである。W・ディルタイは「人間を對象とする諸科學が人間の自己自身に對する省察といふこの遙かな目標を目指して絕えず進んでゐるといふことは歷史が明らかに示してゐる」(註7)と云つてゐる。文化科學方法論上の種々なる問題、例へば「理論的價値關係」と「實踐的價値判斷」の區別の如きが生ずるのも正に右の文化科學の特性に基づくと考へられるのであるが、前述せる先驗論的概念構成論と稀少性定義の兩者に依る存在の相對化—即ち經濟學的認識主觀の意識に於けると、欲求的經濟主體の意識に於ける—は右の文化科學の特質に、その相分たるべき論理的根據を有するものと思ふのである。

左右田氏の經濟的文化價値の論議は杉村廣藏氏に依り所謂經濟性の原理として具體化せられた。茲にその事實的過程は如何にあらうと、その論理的意味に於いては、認識論上の前者の論理的觀點は後者に於いて經驗科學への適應を見出すものと考へられると共に、文化科學の本質的構造より來る二つの方向であつたと思ふのである。

（註1）A. C. Pigou, op. cit., P. 11.

（註2）所謂稀少性原理が心理主義的或は心理學的なものに非ざる所以は例えばL・ミーゼス等に於いて人間行動の意味の把握と云ふ點から說かれてゐる。(L. Mises, Grundprobleme des Nationalökonomie, P. 143-145.)

（註3）リッケルト著、佐竹・豐川共譯「文化科學と自然科學」八二頁

（註4）E. Cassirer, Zur Einsteinschen Relativitäts-theorie, P. 79.

（註5）下村寅太郎著「自然哲學」九三—一三七頁

（註6）リッケルト著、前揭書　六八—七一頁

（註7）ディルタイ著、水野・細谷・坂本共譯「歷史的理性批判」ディルタイ全集第四卷、創元社刊　一〇頁

五　稀少性原理と予解

リッケルト、ディルタイ、ウェーバー等に於ける文化科學的認識は予解的と云はれる。私は右に論じて來た稀少性定義に於ける認識とこの予解的認識を對比して考察してみよう。これを考察せんとする所以は次の如くである。即ち既述の如く稀少性原理は E=F(P. G) として定式化せらるべき關係概念であつた。併し關係概念と云ふものは自然科學的（物理學的、心理學的等）現象に於いても成立する事は云ふまでもない。それ故 E=F (P. G) が自然科學的現象の關係概念的定式化と異なる所以を考えてみなければならない。又關係概念に於いては、すべての事物が個的な時間・空間に於いて現存するものとして把握せられるとしても、(註1)リッケルトが云ふ如く歷史的（價値的）個性と單なる量的個性とは區別せられなければならないであらう。この爲に私は E=(P. G) そのものを成立せしめる認識が如何なるものかを明らかにする必要があると思ふのである(註2)（特に予解的認識に對比せしめて）。

J・S・ミルに始まり、J・E・ケアンズを通じJ・N・ケインズに至る經濟學方法論上の基本的な考へ方の一つは、經濟現象とは心的及び物的現象の混合形態であり、從つて經濟的認

識は、心的及び物的現象に就いての諸法則をプレミスとする演繹的認識であると考へる點にある。[註3]而して茲に於いては、心的なるものも物的なるものも共に存在[註4]として把握せられ、所謂外からの觀察或は說明がその認識の特質をなしてゐる。これに對して、リッケルト、ディルタイ、ウェーバー等に於いては周知の如く精神科學或は文化科學の對象は、存在に對する價値或は意味そのもの、或はかゝる價値、意味がその中に實現せられ體現せられているもの、即ち價値、意味を荷ふものであつた。勿論價値を荷ふとは我々の主觀が附與する事である。

而して斯く考へられた所以は、人間の行爲の自然の運行と區別せられる所以のものは、前者が何等かの動機を通じて何らかの主觀的意味―「行爲者の主觀的に思念した意味」"der subjektiv gemeinten Sinn des Handelnden,"[註4]を有する意識的活動である、―少くともそれが行爲の原型である、―と云ふ點に存すると考へられたからである。自然現象に於いては過去が現在を、そして未來を規定する、所謂因果的である。人間の行爲に於いては逆に未來が現在を、そして過去をも規定すると云ふ意味がなければならない。「目的合理的」zweckrational「價値合理的」wertrational でなければならない。從つて斯かる人間の行爲を認識の對象として、之を認識するには、單に外からの觀察に依る事は出來ず、內からの理解、即ち價値或は意味の了解、或は追體驗がその根底とならなければならないと考へられて來るのである。

これに就いて茲には唯次の點を問題とする。即ちこの立場に於いてはその自然科學に對する文化科學の特質が認識の面から主知主義的に考へられてゐると云ふ事である。その存在と價値の對立は認識の對象のそれであり、又普遍化的と個別化的概念構成の對立は認識の作用のそれであり、更に又了解、理解とは認識そのものの特質である。それは何處までも、ものに對する解釋の立場から考へられた區別であり特質であると思ふ。人間の行爲は何らかの意味を荷つている。併し意味を荷ふには荷ふものがなければならず、更に荷ふと云ふこと、事實がなければならない。或は意味を、價値を考へると云うなら考へるもの、考へること、考へると云ふ事實がなければならない。問題は存在に對する價値、意味そのものにあるのでなくして、價値を荷ふもの、荷ふと云うこと、荷ふと云ふ事實そのものにあるのである。例へばそれは價値の主觀的なるか客觀的なるかに問題があるのではなくして、たとへ主觀的な價値を荷ふものであらうとかく荷ふもの、かく荷ふと云ふ事自體は疑い得ない嚴然たる客觀的事實でなければならないと云ふが如くである。認識と云ふ[註6]ものも單なる作用ではなくして、そこには認識すると云う事實がなければならない。又ものは單に認識の爲に存在するものではなくして元來人間に對する行爲的抵抗としてあるのである。認識する事も實踐でなければならない。價値を荷ふと云うこと、考へると云ふこと、かかる行爲的事實性こそ現實でなければならない。

斯く考へ得るならば我々が文化科學の特質、更に經濟概念を求める根本的立場は所謂觀察の對象としての存在的區別より求むべからざるは勿論、又單に認識の面より所謂認識論的にその對象及び作用から區別し之を求めるに止まるを得ない。我々の根本的立場は經濟財とは之を人間に對するものの一種の行爲的抵抗狀態―一種とは勿論ものの特殊性ではなくして、すべてのものをその可能性に於いて含む狀態そのものの特殊性―に於いて把える事である。而も把えるとは觀察的に把える事ではなく又かかる狀態に對する解釋の立場から理解する事でもない。それは經濟人自身の自覺である。經濟人とは經濟的抵抗狀態の構成要素であり、かかる狀態そのものに於いてあるものであると共に、かかる狀態そのものの自己限定として自ら自覺し、斯くて狀態そのものを把える辯證法的自覺的主體と考へられるものでなければならない。經濟人の自覺は即ちこの經濟的狀態（世界）の自覺であり、逆に後者は前者を通じて自らを明らかにする如きものでなければならない。謂はば、世界內存在の世界內超越としての自覺こそ經濟人の在り方であると共に、それが經濟的認識の根本原理となるものでなければならぬと思ふのである。

飜つて E＝F(P.G) に於ける經濟性を考へるならば、茲にPは單に欲求的自己として目的合理的に行爲し P∨G の關係に立つのみではなくして、その自覺として E＝F(P.G) そのものを成立せしめるものでなければならない。從つて E＝F(P.G) は自然現象の關係概念的定式化に於ける如く、單に對象的事象の相關性を定式化したものではなく、又茲にEとは、この關係自體に於いて存する主體の自覺內容であり、又 E＝F(P.G) とはかかる主體の於いてある關係狀態（世界）自體の自己表現の形式と考へられるものである。それは經濟事象の存在構造の表現形式であり、而してその表現は經濟事象內存在の自覺、所謂內省 introspection を通じてなされるのである。了解的認識の立場からすれば、その了解的主觀は何處までも了解の對象に對する解釋的主觀に止まるであらう。これに對して內省、自覺とは事象內存在の、事象そのものの、底からの反映である。若し內省を主觀的と云ふならば、その主觀的とは何を意味するか、又如何なる立場からかく云ふかを自問すべきである。

私は前に先驗論的概念構成の原理は關係概念としての稀少性定義の經濟概念に於いて自らの具體的適應を見出し得ると論じた。併し今や稀少性原理に於ける認識、即ち內省（自覺）の分析を通じて得られる結論は、稀少性定義の經濟概念の論理的意義は方法論乃至認識論上の先驗主義の經驗科學としての經濟學への具體化と云ふに止まらず、後者の觀點を存在論的に越え行くものであると云ふ事である。尤も稀少性原理に於ける內省の

原理は尙自己が自己を見ると云ふに止まり、それが眞に世界の自覺と云う意味を有するとは考へられない點に於いて、又その世界そのものが抽象的であると考へられる點に於いて尙主觀的と考へられるが、少くともその方向に於いて右の如く考へ得ると思ふのである。

（註1）リッケルト著、前揭書　一九五頁

（註2）この事は、同じく限界概念に依る分析をなすウイーン學派とローザンヌ學派の思考樣式の相違を見るに重要な點になると思ふ。

（註3）例へばケアンズは次の如く云つてゐる。"The subject matter of Political Economy is thus neither purely Pysical nor purely mental, but possesses a complex character, equally derived from both departments of nature, and the laws of which are neither mental nor physical laws, though they are dependent, and as I maintain, dependent equally on the laws of matter and on those of mind." (J. E. Cairnes, The Character and logical method of Political Economy, P. 48)

（註4）"It may be well.....to consider the position occupied by economic speculation in relation to the two great departments of *existence*—matter and mind." (J. E. Cairnes, op. cit., P. 43)

（註5）M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, P. 405.

（註6）かかる事實の考へは西田幾太郎氏の所謂 Tat-Sache の考へに據つてゐる。

六　法則的普遍性

リッケルトの云ふ如く現實の合理的認識の可能なる道は、現實を同質的連續へか、異質的非連續へかのいずれかへ還元する唯二つの道しかないとすれば、更にこの兩者が論理的には絕對に相容れない兩端であるとすれば、法則的普遍性は自然科學にのみ認められ、價値的個性的なものと法則的なものとは何處までも相對立し、價値的なるものに就いての法則性と云ふが如き事は所詮論理の矛盾でしかないであらう。そして價値的個性的なものに關する文化科學の客觀性は、その價値の普遍性、客觀性に、而も文化科學の領域に於いては「事實上一般に（換言すれば萬人によつて）價値ありと認められる」（註1）如き意味の價値の經驗的普遍性に求めるの外はない。そして諸々の社會的文化科學の事實に當面して曖昧なる「中間領域」の論議を以て答へる外はなかつたと思はれる。この點はM・ウェーバーの所謂「理想型」の論議に依つて社會科學の獨立性の確證と共に克服せられた事は周知の事柄である。

併しウェーバーの理想型の論議に依つて法則科學としての文化科學の可能性が示されたであらうか、彼の了解の方法は法則的普遍性を獲得し得る如きものであつたであらうか。否、彼が本來求めてゐるものは法則的普遍的なものではなくして、逆にかかる法則から演繹し得ない個性的現實の認識であつた。（註2）理想型も法則もその手段に過ぎない。更に彼の考へる法則 Gesetz とは個性的なものと兩立し得ないものである。彼は云ふ「精密自然科學にとつては『法則』は、それが普通妥當的であればある程、益々重要であり、價値があるものであるが、その具體的前提に於ける歷史的現象の認識にとつては、最も普遍的な法則はその內容が最も空虛なものであるから、通常又最も價値に乏しい。と云ふのは、類概念の妥當―、その範圍―が包括的であればある程、それは豐かな現實から我々を遠ざけるからである。實際類概念が出來るだけ多くの現象に共通なものを含む爲には出來るだけ抽象的な、從つて內容に乏しいものでなければならない。文化科學にとつては、普遍的なもの（註3）の認識は、それ自身として決して、我々に價値あるものではない」と。L・ミーゼスは云ふ、「ヴィンデルバント、リッケルト、M・ウェーバーは自然科學と歷史とを識別したが、法則科學としての社會學があると云ふ事は依然として彼等に緣遠い事柄である」（註4）と。「M・ウェーバーは國民經濟理論の學問體系を認めなかつた。國民經濟學と社會學は彼の眼には歷史科學であつた。社會學は、彼にとつては、より强度の普遍化的な總括的な歷史の如きものである」（註5）と。又云ふ「彼は社會學として、人間行動についての法則科學とは全く別な或るものを理解してゐた」（註6）と。個性的なものと法則的なものとは所詮兩立し得ないものであらうか。この爲には先ず『法則』として何を理解するかを考へる必要がある。法則として第一に考えられるものは tendency としてのそれである。例えばJ・E・ケアンズは「經濟法則は現象が起る秩序を示すのではなく、現象がそれに從う所の傾向を示す。それ故法則はそれが外的事件に適用される時は、攪亂的原因の存しない限りに於てのみ眞理である」と云つてゐる如きである。（註7）茲に tendency とは云ふまでもなく事實そのものとは異なる "the doctrine expresses not a matter of fact, but a tendency." （註8）と云はれる如く。併しそれは a matter of fact ではないが tendency as fact と考へられるもの と思ふ。所謂 ceteris paribus とは事實からの、而して事實に於ける抽象を示すものと考へる。かかる法則の實質的な普遍性は所謂事實界に於いて繰り返えし經驗しうる事、卽ち大量的觀察に基ずく普遍的傾向性を示すものである。從つてそれは前述の類概念の構成に於ける如く、現實に於ける個別的現象の中に見られる或る普遍的なる關聯個別性の抽象に於ける普遍的關聯と考えられるものである。（類概念的法則性）（註9）我々はかかる法則性を考える限り個別的なものと法則的なものとは形式論理の內包と外延の如く相容れ

ざるもの、逆比例的關係に立つものと考へる外はない。M・ウェーバーの問題はかかる抽象的法則の中に入り來たらざる個性的なものの認識にあつた。彼の理想型は勿論、彼自ら云ふ如く類概念的なものではない。併し彼が法則として考へる所は（その肯定、否定、及びそれが認識の目的たるか手段たるかに拘らず）右の如くであつたと思ふ。それ故、所謂了解も個性的なものの認識である。L・ミーゼスが意味の把握（Erfassung des Sinns）を更に所謂 "Verstehen" と "Begreifen" に區別し、次の如く云ふ所以である「我々は人間の擧動についての科學に用ふる所の、意味の把握に注意を向ける方法の中に於いて把捉 Begreifen と了解 Verstehen とを區別せんと思ふ。把捉は推理的思惟に依つて意味を把握せんとし、了解は感情移入的精通に於いて一つの全體として意味を求める」と。(註10)

E・カントは「繼起する現象の客觀的關係は、單なる知覺に依つては定まらない。それで此の關係が決定せられたものとして認識されるためには、兩狀態の何れかが前に、何れかが後に定立され、それと反對に定立されることはできぬといふことがそれに依つて必然的に決定せられるやうに兩狀態の關係が思惟せられなければならない。然し綜合的統一の必然性を伴う概念たりうるものはただ純粹悟性概念あるのみで、且つ概念は知覺中に存するものではない」(註11)と云ふ。因果法則の必然性は單なる知覺表象の普遍性に依るものではなくして、因果律なる範疇の先天的必然性でなければならないと。

又、L・ミーゼスは「社會學的因果命題は、概して生じがちであるが、必ずしも常に生じなければならぬ事はない所のものの言表ではなくて、その前提諸條件が與へらる限り、必然的に常に生じなければならない所のものの言表である」(註12)と云ふ。

かかる論理的要求を實質的に滿たしうる如き法則とは如何なるものであるか、此を私は前述の E=F(P.G) の形式に於いて見出しうると考へるのである。何となればこれはすべての個別的時間、空間に於いてその一般的妥當性を有するものなる故である。而もかかる謂はば關係概念的法則に於いては決して個別的なものは捨象されてゐない。又勿論それはウェーバー等に於ける個性的なものそのものではない（それは歴史學の問題である）。唯個別的なものの捨象から得られるのではなくして、個別的なものに於いて、個別的なものを保有する一般的妥當性を有するものである。K・レヴィンはトポロギー心理學の法則の確立に當つて次の如く云つている。「過程の力學說は、常に具體的個人と具體的狀態との關聯から、そして內部的諸力に關する限りは、個人を作りあげる種々なる機能的諸組織の相互關聯から推論せらるべきものである」(註13)と。又「歴史的過程の偶然は、狀態の變化を體系的考察から除外する事に依つて克服されるのではなくて、具體的な場合の個人の性質を最も完全に考慮する事に依つてのみ克服される。それは法則の一般的妥當性と個々の場合の具體性とは對立するものではないと云ふ事、又、具體的狀態の全體性への考慮が、屢々反復されるものの出來る限り多くの歴史的蒐集への考慮にとつて代らなければならないと云ふ事を留意する事に依存してゐる。この事は方法論的には一つの場合の重要性は、そしてその證明としての妥當性はその出現が屢々なるか否かに依つて評價され得ない事を意味してゐる」(註14)と。E＝F(P・G)はこの要求を滿たし得るものである。而もそれが單に心理學の法則的定式に盡きざる所以を、私は前述の如き P の內省、自覺の原理の中に求め得ると考へるのである。

（註1）リッケルト著、前掲書　一六三頁
（註2）M. Weber, op. cit., P. 172.
（註3）M. Weber, op. cit., P. 179-180.
（註4）L. Mises, Grundprobleme der Nationalökonomie, P. 70.
（註5）L. Mises, op. cit., P. 71.
（註6）L. Mises, op. cit., P. 74.
（註7）J. E. Cairnes, op. cit., P. 118.
（註8）J. E. Cairnes, op. cit., P. 105.
（註9）かゝる法則に就いてはG・シュモーラー著、戸田武雄譯「國民經濟、國民經濟學及び方法」の一四四―一六五頁參照
（註10）L. Mises, op. cit., P. 125.
（註11）E・カント著、天野貞祐譯「純粹理性批判」（上卷）岩波文庫二五五―二五六頁
（註12）L. Mises, op. cit., P. 88.
（註13）K. Lewin, Dynamic Theory of Personality, P. 41.
（註14）K. Lewin, op. cit., P. 41-42.

七　結　論

以上に於いて私が明らかにせんとした事は、第一に方法論乃至認識論上の先驗論的概念構成の論理的意義は關係概念の論理的性格に相應すべく、斯くて關係概念を媒介として、先驗主義と關係概念による經濟理論との論理的結合の可能を示さんとし稀少性原理の中に具體的に此を示し得ると考へた事である。次に文化現象としての經濟現象に於いては、その關係概念は世界的內存在の世界內超越としての自覺（內省）に依つて成立するものである事、かくて成立する理論に於いてはその客觀性、その法則の普遍性（必然性）と云うものが根本的に異なつたものとなつて來る事を明らかにせんとしたのである。

（本研究は本塾學事振興資金補助金に據るものである。）